

川喜田二郎著

発想法

創造性開発のために



中公新書

136



中公新書 136

川喜田二郎著

発想法

創造性開発のために

中央公論社刊

川喜田二郎 (かわきた・じろう)

1920年(大正9年), 三重県に生まれる。
1943年, 京都大学文学部地理学科卒業。
大阪市立大学助教授を経て, 現在, 東京工業大学教授。文化人類学専攻。
1958年, 西北ネパール学術探検隊長。

著書『人文地理学入門』

『パーティー学』

『チームワーク』

『人間—人類学的研究』(共編著)

『可能性の探検』

発想法
中公新書 136
© 1967年
検印廃止

昭和42年6月26日初版

昭和45年2月10日19版

著者 川喜田二郎

発行者 山越 豊

本文印刷 三晃印刷
表紙印刷 東京プロセス
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2-1
振替東京34 電話(561)5921代

まえがき

ここで扱う「発想法」すなわちアイデアを創りだす方法は、発想法一般ではなく、私の案出した発想法にかぎられている。発想法という言葉からして、私なりに位置づけたそれであることを、ご諒解いただきたい。

その発想法は、もともと野外科学の必要性から始まった。ことに、野外で観察した複雑多様なデータを、「データそれ自体に語らしめつつ、いかにして啓発的にまとめたらよいか」という課題から始まっている。かような課題は、科学的方法論としては、今日までまともに解決されたことはなかったのである。日本ばかりでなく国際的にも未解決である。現状においては、その必要性の根源となった「野外科学」という用語さえ、まだきわめて通りが悪い。その意味するものがないのであるかは、本文をご覧いただきたい。

二、三の習作的な試み（多くは未発表）のちに、意図的に発想法を用いたのは一九五四年ころであつたろうか。それは前年にヒマラヤを訪れたときの、民族地理学的観察データをまとめるにあたってである。その結果は「ネパールヒマラヤにおける民族地理学的諸観察」（和文・英文）として発表されている。いまから思えば幼稚な作品ではあるが、それでも各国の専門誌が好意ある書評をしてくれた。それは単に観察資料の羅列的記載でなく、読者に啓発的暗示的なものを与え得たからだと思う。このときの野外資料の処理方法については、拙著『ネパール王国探検記』（光文

社の終章に感想ふうにしこし触れておいた。

当時用いた方法は、幼稚な初期的なものだった。以後は、徐々に改良工夫を加えつつ、ほとんど自分の仕事にのみそれを使っていたのであった。他方、共同研究のありかたやそのためのチームワークの重要性については、終戦直後からひきつづき私は関心を払っていた。したがっていつしか次のような発想が私に訪れたのも、いわば宿命である。すなわち、「バラバラのデータをいかにまとめるか」ということと、「バラバラの衆知をいかにまとめるか」ということとは、「異質の統合」という一点ではまったく同じである。「衆知をあつめる法」〔思想の科学〕一九六二年第五号二―三ページ〕という記事を書いたころには、はっきり両者の自覚的な結びつけを考えていた。

こうして一九六四年に『パーテイー学』（社会思想社）を書いたときには、データの啓発的統合法と衆知を集める法とチームワークのあり方との三者を、連合的に考えるようになっていた。そしてこの三者の統合の焦点として、人間の創造性をいかに育てるかを構想したのである。その結果は企業界・技術界・教育界の多くのかたがたの共鳴を得ることとなった。

かような事態の進展の結果、私は、自分だけで使い馴れてきた発想法の技法を、より多くの人びとにわかりやすく体系的に説明せざるを得なくなった。そしてこのような「当惑すべき」状況こそ、常に人間を啓発へと追いやるものである。私の発想法は、これを機に、過去二年の間に、格段に整備と体系化の時期に入った。こうしてこの本が生まれたのである。

どんな発想法でもそうであろうが、この本でのべた発想法も、バカになって徹底的に実行して

みなければ、けっしてわからない。ところが、「考える」ことを仕事以外のこととして省みなかった人びとは、この実行を避けてやすきにつく。他面、知識人になればなるほど、頭の中だけでわかったつもりで素通りしてしまふ。こういうのは「わかった」部類にも入らないのだというところが「わからない」のである。多くのかたがたがこの発想法に興味を示された。しかし、一部分でも実行された人の数はうんと少ないようである。そして「バカになって」首尾一貫的に徹底して試み、わかって下さったかたは、私以外にまだ一人だけである。

この意味もあって、ここでとりあげた発想法は、いまやテストを必要とする段階に入った。すなわち、できるだけいろいろな分野で、いろいろな状況下で、じっさいに試みた事例を集めるべき「探検」段階を必要としている。不幸にして私は他に本職があり、現在この発想法を研究テーマにするわけにはいかない。しかしこの仕事は、誰かによって本腰を入れてなされねばならない。そういう人の現われることを、私は切に願っている。その人の手で、この本が徹底的に書きなおされる日がこよう。またそのときに、はじめて本格的なマニュアルができるであらう。

一九六七年五月

著者

目次

まえがき

I 野外科学——現場の科学

3

私の体験から生み出した発想法 書齋科学と実験科学 野外科学の特徴 野外科学の重要性

II 野外科学の方法と条件

25

方法論の体系化が必要 問題提起と内部探検 外部探検 野外観察の四条件 記録の方法 データの分類法 データの統合法 計画技法

III 発想をうながすKJ法

65

備品・探検・記録 グループ編成 KJ法A型
図解法 KJ法AB型による文章化 叙述と解
釈をハッキリ区別せよ ヒントの干渉作用 累
積的KJ法

IV 創造体験と自己変革

115

発想法とインスピレーション KJ法の先駆者メ
ンデレーフ KJ法の理論 「わかった」とい
うこと KJ法の訓練 日本人とKJ法 情
報処理における日本人とアメリカ人 日本人の創
造性 切実な課題をえらぶ

V KJ法の応用とその効果

151

書物などの理解に 創造性開発の技法 会議へ
の応用 少数意見の尊重とは？ 虚業意識の克
服 職場のチームワークに 説得の技法として

VI むすび

189

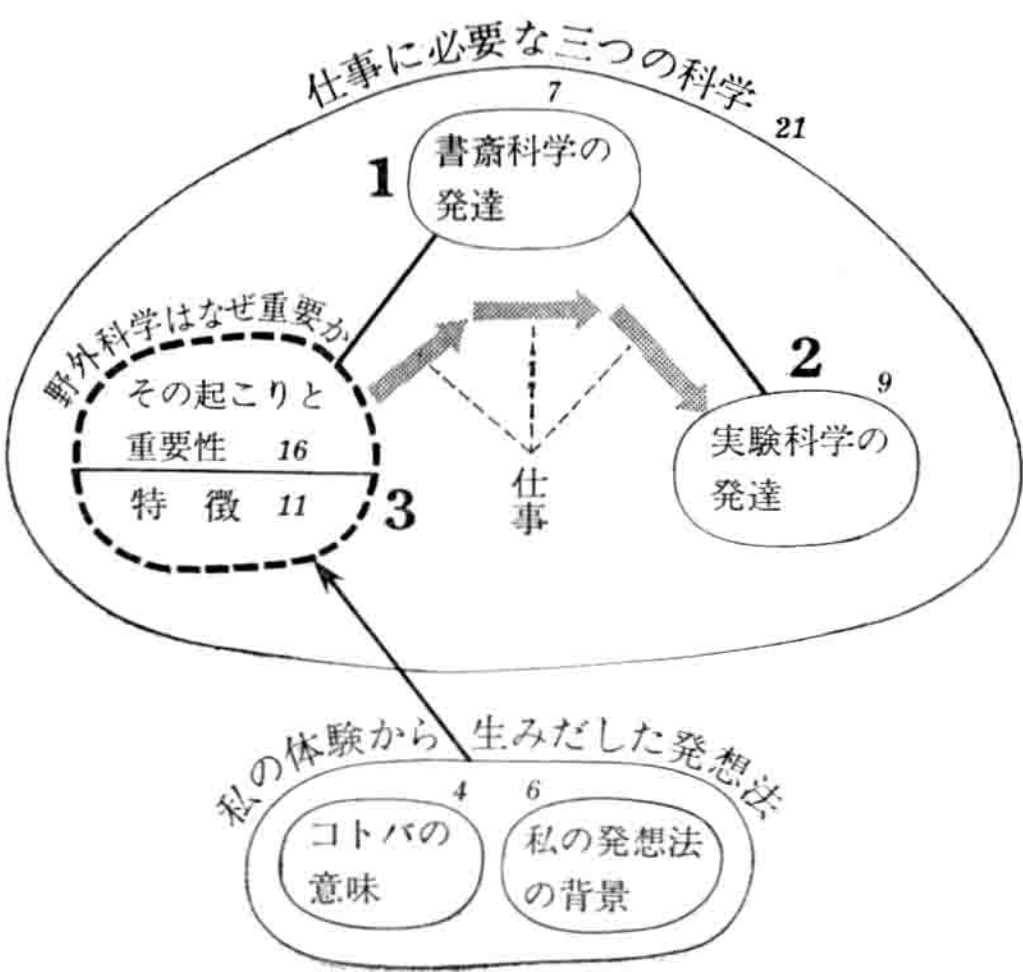
変革の時代と野外科学 現場を逃避するな 日
本人の芽を伸ばせ

参考文献

197

発想法

I 野外科学——現場の科学



私の体験から生み出した発想法

発想法というものはいったい世の中にあるのか。文字どおり考えれば、それはアイディアをつくりだす方法である。そんなものはいかがわしいものであって、いいかげんな思いつきであり、きわものとして取りあげられるのではないかと考える人が多いかもしれない。私もはじめは発想法などを考えるつもりはなかった。ところが、その私のなかにいつのまにか、発想法が存在するという見解が成長してきたのである。

発想法という言葉は、英語でかりにそれをあてると、アブダクション(abduction)がよいと思う。この言葉を私に教えてくれたのは、京都大学人文科学研究所の哲学者上山春平氏である。上山氏は、アブダクションという言葉を経理学的な言葉として説明した。インダクション(induction 帰納法)、デダクション(deduction 演繹法)とならんでアブダクションがあるのであり、アブダクションは日本語であてると、発想法といわざるをえないだろうということであった。

この三つの分け方は、ギリシアのアリストテレスがすでに問題にしている。それはアリストテレスによって論理学の三つの方法としてあげられた。それ以来、インダクションとデダクションは連綿として発展させられ、今日まで学問の重要な方法となっている。ところが、アブダクシヨ

ンのみは、アリストテレスのせつかくの提唱以来埋もれたままで、現在まで十分に伸びていないという。これが上山氏の見かたである（同氏談）。

それでは最近に、アブダクションという言葉を使った学者がいるか。これも上山氏の著書から教えられたことだが、哲学者パースがそれを唱えている¹。パースはアメリカのプラグマティズム哲学の元祖のような人であった。その後半生において、彼はとくにこの言葉を使った。彼ははじめヘーゲルの弁証法を軽蔑し、あれは厳密な論理学ではないといていた。ところが、後半生にだんだん考え方が変わって、事実上、弁証法に共感を覚え、それに関連して彼流の表現でアブダクションという言葉を使った。

字引を引いてみると、日常用語としてのアブダクションには物騒な意味がある。「子どもをかくどわかす」とか、「ひったくる」とか、「他人の奥さんを奪う」などの意味がある。それとも関連しつつ、論理的には、いろいろな資料から、なにか新しいアイディアをひっぱりだすという意味で使われるわけだ。あるいは、モヤモヤとした情報群の中から、いっそう明確な概念をつかみ出してくる意味あいがある。

パースが取りあげたアブダクションという言葉の意味あいと、アイディアをつくりだす発想法として私が考えているものとを対比してみると、主要な点ではまったく同じところを問題にしているようである。もちろん世の中は広い。アイディアの発想法という問題を、研究的あるいは実

用的見地から探究した人びとも、相当の数にのぼる。しかも技術革新その他変革の時代にさしかかったせいも、ここ十数年くらいの間にはこの種の研究がおびただしく出はじめているようである。そして、すでに発想法に関する諸研究を紹介し研究する人びとさえ、日本にも現われはじめている。なかにはたいへん有益なものもあるのだが、それらを論ずるのが、ここでの私の使命ではない。それで、たまたま私が散見していろいろ教えられたもののみを、ご参考までに巻末に少少拾いあげるにとどめよう。

ここでの私の役割は、私自身が自分の必要上から実学的に創りだした、ひとつの発想法を紹介することである。それゆえ、発想法を取りあげるようになった私の個人的な背景を、まず話したいと思う。

その背景のもっとも重要なものは、「野外科学」の必要性からきたのであった²。科学というものの分けかたはいろいろできると思うが、一つの分けかたとして、科学は次の三つに大別するところが重要である。それは書斎科学、実験科学、および野外科学という言葉で呼ぶのがふさわしいであろう。そして、私の意味する発想法は、この野外科学の方法とひじょうに関係が深いのである。こう説明しても、このような三区分別をして、こんな名で呼んでみたのは私自身であるから、その内容を、かいつまんで説明しなければならぬ。現実に学問がおこってきた歴史をみると、学問ないしは科学をこの三つに分けることには大きな意味があると思う。

書齋科学と実験科学

前記のように三つに分けた場合、歴史的にまず最初に古くから発達したのは書齋科学であった。昔は、学問といえはこの書齋科学ばかりであった。そのような学問が人類におこったのは、われわれの祖先たちが部族的、田園的な文化の段階を乗りこえて、都市文明ともいふべき文化の段階に到達してからなのである。この書齋科学の特徴は、次の二つの点にあると思う。

一つは過去の情報のストックにおおいに依存していることである。これを別の言葉でいうと、古典に依存している。あるいはもうすこし広くいうと、文献に依存していることである。すべての学問が文献に依存しているには違いないが、とくに書齋科学で依存する文献は、一度だれか先人の頭脳のフィルターをとおして、体系づけられた形の情報になっている文献である。

たとえば歴史学者は古文書を資料に使うが、これはここでのいう書齋科学における文献ないしは古典とちがうのである。彼が日本の近世地方史研究の学者だったならば、日本の町や田舎に行つて、そこでいろいろな古文書を見だし、庶民資料なども使う。その古文書に書かれているものは、文献にはちがいない。しかしその特徴は、なんら学問的体系をつくらうという意図でなしに書かれた文献であり、それらがたくさん存在する。たとえば借金の証文とか、お上に奉る訴状などがそれである。そのような資料を探し求めて研究するのは、むしろ後でのべる野外科学に準ず

る性格を持つのである。

これに反して、書齋科学に関連づけてここにいう文献とは、孔子がどういったとか、聖書の言葉とか、いろいろな形で体系づけようとした先学者の文献という意味である。したがって、狭くいえばいわゆる古典といわれるものになる。これに大きく依存しているのが書齋科学の一つの特質である。その意味では、西暦紀元前数世紀のギリシアの学問、おなじころから始まった儒学書、すなわち中国の古典といわれるもの、イラン（ペルシャ）文明の遺産、インドの古典など、すべて過去の文明圏といわれるものが、たくさんこういうものをつくりだしてきた。もちろんその後にも、それらを発展させ、あるいは註釈した数々の文献がある。それらに依存して仕事をする学問が、書齋科学である。

書齋科学のもう一つの大きな特徴は、頭の中の推論に重きをおいたことである。こうすればこうなるはずであるという論理的なつながり、推論過程を重要視することである。一方では文献に依存しながら、他方では推論過程を重要視する。文献と推論を重要視する。これが書齋科学の大きな特徴である。

なぜ特徴かといえば、ほかの実験科学、野外科学などでは、現実界の経験と観察が重要な基盤をなすのに対して、書齋科学ではそれらがなくても一応ことがすんだということである。文献は自分の頭の中の思考でないとしても、しよせんは先人の頭の中からの産物である。そこで書齋科

学では、現実界を観察しないで、一応学問が成立していた。つまり、ものに触れなくてもいいのである。孔子が下町に実験室を建てたとか、中世の神学者が学問をするために、野外観察に歩きまわったということはあまり聞いたことがない。

ひじょうに古い伝統をもったこのような書齋科学に対して、実験科学がおこってきたのはきわめて新しい。幾人かのすぐれた先駆者たちの胎動を省いていえば、実験科学は西欧社会の近代化の始まりとともにおこってきたものである。その実験科学は、実際に現実界のものに触れて、観察したことを重要な拠りどころにする。すなわち経験科学的な面をもっている。このような実験科学は書齋科学の人びとからみれば、はじめのうちは学問というには値しないかのように蔑まれさえしたのである。ものを観察するなどということは下品なことだった。また、子供だましのような単純なことと思われた。それは形而下的な問題であり、それを実験したりして喜んでいるのは、子供くさい話であるという雰囲気であった。あるいは、いかがわしい錬金術師くずれとも思われたろう。ヨーロッパ、たとえば英国のどこかの古い大学にでもゆくと、学問は書齋科学が本物だというムードがいまでもすこしはただよっている世界があると思う。

実験科学の世界は、このようにばかにされながらスタートを切ったとしても、いったんスタートを切ると、たくましく成長していった。そのあげく、ついに今日では、科学といえばすなわち実験科学、という印象すら社会に与えている。たいへんな社会的信用を得るにいたった。